

平成17年11月の解説（週間天気予報）

【11月の天候状況】

月の前半は日本付近を低気圧と高気圧が交互に通過しました。低気圧の通過時には全国的に雨が降り、通過後は一時冬型の気圧配置となって北日本や東日本の日本海側の地方では雨や雪が降りましたが、その他の地方では晴れました。月の後半は冬型の気圧配置が続き日本海側の地方では雨や雪の日が多くなりましたが、太平洋側の地方では晴れの日が多くなりました。

月を通しての日照時間は、ほぼ全国的に平年より多くなり、太平洋側の地方では多くの観測地点で平年の120%を上回りました。また降水量は、北海道と本州の日本海側の地方と九州では平年の120%を上回った観測地点がありましたが、北海道のオホーツク海側と本州の太平洋側の地方では平年より少なく、平年の40%を下回った観測地点もありました。月平均気温はほぼ全国的に平年と同様でしたが、北海道では平年より1℃以上高い観測地点もありました。

【11月の検証結果】

「降水の有無」の適中率（3～7日目の平均）は全国平均では例年（注）より1ポイント高い72%でした。東北地方では6ポイント、沖縄地方では8ポイントそれぞれ低くなりましたが、関東甲信、近畿、四国地方では5から7ポイント高くなりました。最高気温（2～7日目の平均）の予報誤差は全国平均では例年より0.2℃小さい2.1℃で、ほとんどの地方で例年より小さく、特に北海道地方では0.5℃、近畿地方では0.4℃小さくなりました。最低気温（2～7日目の平均）の予報誤差は全国平均では例年より0.3℃小さい1.9℃で、ほとんどの地方で例年より小さく、特に北海道、東北、東海、近畿、中国、四国地方では0.4℃から0.6℃小さくなりました。

（注）例年値は気象庁HP（予報精度検証）内「月毎の精度の例年値」を参照してください。

【11月の週間天気予報から】

11月6日は前線を伴った低気圧が日本海を北東に進み、全国的に広い範囲で雨が降りました。週間天気予報では7日前からこの雨を予報していました。ところが、その前日の5日については、同じように雨を予報し続けたにもかかわらず実況では雨が降らず、雨の予報は空振りになりました。

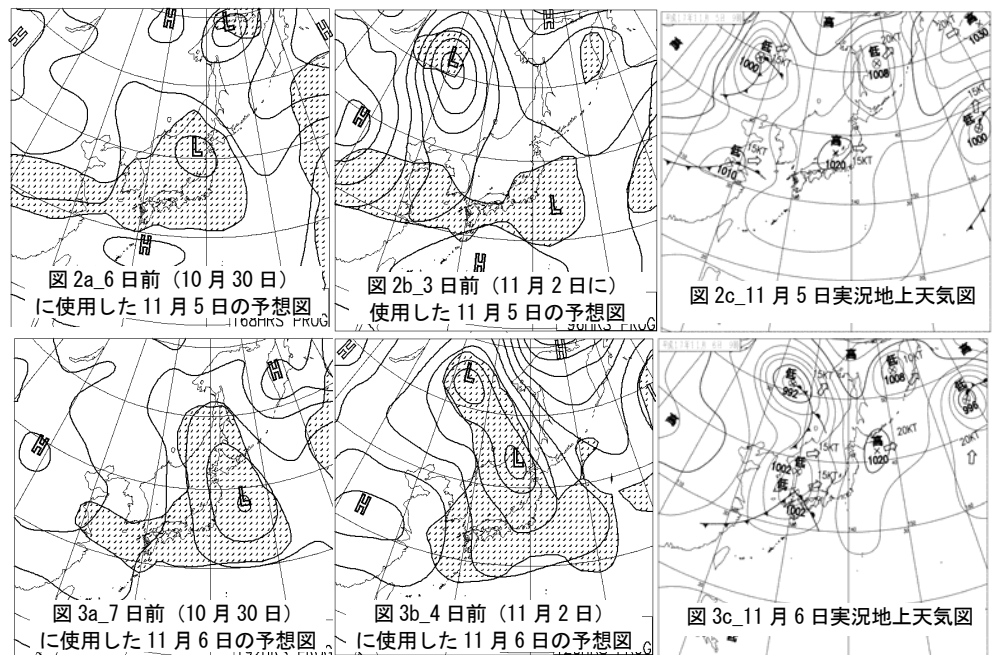
11月6日を予想した天気図では7日前（図3a）、4日前（図3b）と次第に実況天気図（図3c）に近づいています。一方、11月5日を予想した図では6日前（図2a）には北日本に低気圧があって、ほぼ全国的に降水

	予 報 発 表 日								当日の 実際の 天気(日中)
	10月			11月					
	29日	30日	31日	1日	2日	3日	4日	5日	
5日									5日
6日									6日

表 2005年11月5日と6日の東京の天気
の予報と実際の天気

域(陰影をつけた部分)がかかっています。3日前(図2b)の予想図でも低気圧があります。しかし、実際は北日本を中心に高気圧に覆われ、予想されていた低気圧は発生しませんでした(図2c)。

11月6日のように低気圧が発達して通過する場合に比べて、11月5日の例のように発達しない低気圧の天気予報は難しくなります。



【1月の週間天気予報の利用にあたって】

1月後半から2月前半にかけては、1年のうちで最も気温が低い時期です。強い冬型の気圧配置となって強い寒気が日本付近まで南下してくると、西日本の平野部でも氷点下になることがあります。

2001年の1月は強い寒気が南下してくることが多く、特に月の半ばに気温が下がり、長崎市でも最低気温が氷点下、最高気温も5℃を下回った日が続くなど全国的に気温が低くなりました。このため、東・西日本の各地で水道管の凍結による断水、水道管破裂、果樹の凍結害などが発生しました。

気温が氷点下になると地表面の水分が凍り、最高気温が上がらないと氷はなかなか溶けません。この状態が何日も続くと凍結による被害が拡大します。

週間天気予報で気温が低い状態が続く予想となっているときは、特に最新の情報に注意して、低温に対する早めの対策を怠らないようにしましょう。

